

## 『断頭台より愛をこめて』 - 白州屋

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

「これまでこの国に対して悪逆非道の限りを尽くしたとが咎により、国王と神の御名において、クロエ・メリクールを死刑とする！」

水を打ったような一瞬の静寂の後、裁判所は大勢の傍聴人による拍手と歓声に包まれた。泣きながら神に感謝する者や、ほっと胸を撫で下ろす者、家族や友人と喜びを分かち合う者に、被告人に罵倒をぶつける者。反応は様々だが、その場のほぼ全員がこの結果に喜んでいたのは確かだった。形だけ据えられた弁護人でさえ、椅子に深く腰掛けて満足げに目をつむっていた。

興奮した傍聴人達から罵倒をぶつけられる中、被告人席には、一人の美しい女が柔らかな微笑みをたたえて静かに座っていた。

あれは恐らく、この国が始まって以来最も無意味な裁判だったことだろう。だが、私情を抜きにしても、その女がしたことを考えれば当然のことだと思える。あの時、全ての国民がそれを望んでいた。兵士に捕まった時点で、既に断頭台への道が決められていたのだ。

そして今、馬車の中でその女、クロエ・メリクールが目の前に居る。目を閉じて、静かな表情で座っている。眉目秀麗で、私と同じ金髪碧眼。何の因果か背格好まで私と同じくらいであり、彼女が捕まってから何度このことで同僚達にからかわれたかわからない。

ともかく、彼女はこうして二日間馬車に揺られて王都に運ばれ、大衆の前で首を落とされるはず手筈になっている。私含め四人の兵士が、彼女の護送役として同乗しているのだ。何ともおかしな話だが、私達は王都で彼女を殺すために、彼女を無事に送り届けなくてはならない。

馬車が揺れ、沈黙の中で鎧とてかせ手枷がガチャガチャと鳴る音だけが響く。その度に私の手は腰の剣に触れ、ひんやりとした鉄の冷たさを感じる。

このまま剣を抜いて対面の女を斬り殺せたら、少しは心が満たされるだろうか。

だが、己の憎しみや義憤のために私まで罪人になる訳にはいかない。実の親に代わって育ててくれた祖父母のためにも、今の職を失いたくはない。

ふと気付くと窓の外は森になっており、外から吹く風が馬車の中にも草と土の匂いを運んできた。懐かしい匂いだ。確か、ぶどう葡萄酒のじょうぞう醸造をやっていた祖父母の家も、こんな森の近くにあった。秋になると、山積みの葡萄と一緒に、祖父の操る馬車に乗って家に帰ったことを良く覚えている。

きようしゆう郷愁に浸っていると、さっきまで黙っていた対面の女がふと口を開いた。

「美しい森ですね。風も心地良い」

髪を後ろに靡かせてそう呟く女の横顔は、神話の女神のように美しく、とてもこれから断頭台に送られる死刑囚には見えなかった。

「そうかい。どうせ最期の風景になるんだ、好きなだけ見てろ」

彼女に見惚れかけていたことはおくびにも出さず、私はぞんざいに返事をした。この女は死刑囚だ。鉄のように冷たく接しなくてはいけない。

すると彼女はこちらを向いて、にっと笑いかけた。

「はい！」

予想外に元気の良い返事と、まるで友人に対するような笑顔向けられ、私は少し気圧されてしまった。

やめてくれ。そんな笑顔を向けるな。私はお前を殺したいほど憎まなくちゃならないんだ。私の両親を奪ったお前を。

しばらく馬車に揺られていると、次第に外が暗くなってきていた。日が暮れるには少し早い時間だ。見上げれば空にはどす黒い雲が垂れ込め、空気の中の湿気が増している。どうも一雨どころじゃ済まなさそうだ。

少しすると、ぽつりぽつりと雨粒が馬車の屋根を叩き始めた。そして案の定、そこから三マイルも進まぬ内に、辺りは天が抜けたような豪雨に包まれた。さっきより大粒の雨が四方から馬車を殴りつけるのが感じられるが、御者は構わず馬を走らせる。迅速に処刑を行うべく、多少無理をしてでも期日までに彼女を届けろという命令が、既に国から下っているのだ。現場の兵士が独断で無視できるような命令ではない。

すると突然、鋭い光が窓の隙間から飛び込んできた。暗闇の中から、怯える女の顔が照らし出されるのが見える。

そして一瞬遅れて腹の底まで揺らすような轟音が鳴り響いた。続いて外から馬がいかなな嘶きながら暴れる音と御者の怒鳴り声が聞こえ、馬車が激しく揺り動かされた。

極限状態で混乱する意識の中で、目の前の光景が単純化していく。死の危険を感じる状況で、目の前には、一人のか弱い女。……助けなければ。

私はあちこちに身体をぶつけながらなんとか彼女に手を伸ばした。互いの身分はそこには無く、ただ純粹に、本能的に、考える前に体が動いていた。

天地が何度も入れ替わり、崖を転がり落ちる樽のように掻き乱される馬車の中で、私は右手で何か温かいものを掴んだと同時に意識の糸を手放した。

家が燃えていた。人が死んでいた。鎧を着た人も、着ていない人も、たくさんの男達が走り回って、殺しあっていた。

私は泥水の溜まった用水路に伏せて、全部が終わるのを待っていた。買ってもらったばかりのスカートに泥水が染み込む感じが気持ち悪かったけれど、私は我慢していた。隠れるようにと言ってくれたお父さんとお母さんはどこかへ行ってしまったけれど、私はひたすら待っていた。全部終わったら、きっと二人とも帰ってくる。私は必死でそう信じて、外のものは何も見えないように、泥水の冷たさと苦さだけを感じていようと努めていた。

頬に水滴が落ちる感覚で目が覚めた。

あんな夢、もう見ることは無いと思っていたのに。

あちこち痛む身体を無理やり起こして辺りを見回した。

いつの間にかちょっとした洞窟の中に寝かされていたようだ。外はもう雨がやみ、太陽が昇っている。

まだ若干もうろう朦朧とした頭で直前の記憶を手繰り寄せる。

確か、豪雨の中突然閃光が走って馬車が揺れて……。恐らく雷に驚いた馬が暴れて逃げ出し、雨で脆くなった山の斜面を馬車が転げ落ちたといったところだろう。そして先に気が付いた誰かが私をここまで運んでくれたのだ。

「よかった、気が付いたんですね！」

座り込んでいると、洞窟の外からクロエが駆け寄ってきた。身体の所々に傷を作っているが、大事は無さそうだ。

「大きな傷は無かったけど、頭を打って気絶していたみたいだから心配してたんですよ？ あ、手当をするために勝手に鎧脱がせちゃったんですけど、よかったですか？」

矢継ぎ早に飛んでくる質問に、少しへきえき辟易する。私がとっさに庇ったからか、同じ事故に遭ったというのにやたら元気だ。

「別にいいから、静かにしてくれ。頭が痛む」

「すっ、すみません……」

少したしなめるとしゅんとしてしまった。こうしていると本当にただの美しい令嬢にしか見えないが、実際は多くの人々の命を奪った大罪人だ。もしあの時私が彼女に手を伸ばしていなかったら、こんなに思い悩む必要など無かつたらうか。

そういえば、いざ落ち着いてみれば何かがおかしい気がする。

「そうだ、一緒に乗っていた人達はどこだ？」

私達が助かったのだから、彼らが生きている可能性も十分にあるはずだ。

すると、彼女の表情が再びかげ翳った。

「それが……、あの方達は、私が目覚めた時にはもう……」

「……そうか。ならせめて、弔わないと」

護送の任に就いた時に顔を合わせた程度だが、それでも同じ国の兵士だ。そう思っ  
て腰を上げようとしたが――。

「駄目です！ その、まだちゃんと歩ける状態じゃないんですから！」

肩を掴まれ、引き倒されてしまった。

護送役としては無防備にもほどがあるが、不思議とそれ以上抵抗する気にはならな  
かった。実際まだ頭が痛むからということもあるが、どうも彼女の言葉には、思わず  
従いたくなる引力でもあるのかもしれない。

「これから私が行って代わりに弔ってきますから。あとついでに馬車のざんがい残骸  
の中に使えそうなものがあったら持ってくるので、ちゃんと寝てくださいね」

そう言い残して彼女は足早に出て行ってしまった。そのまま逃げられるのではとい  
う疑念が頭を過ぎったが、まともに歩くことすらままならない今の私には、彼女の背  
中をただ見送ることしか出来なかった。

夕方になると、クロエは大きな荷物を抱えて帰ってきた。水や食べ物、医療品に  
路銀など、残っていたものは大体持ってきたそうだ。人の死んだところを漁るような  
真似は気が引けるが、今後のことを考えたら仕方が無いだろう。

すると、彼女が手にした小袋がふと目についた。長細くて本当に小さな袋だ。雨の  
せいか、湿っているようにも見える。

「おい、その袋は何だ？」

「えっ、これですか？ これはその、あの、お薬ですよ。馬車の跡で見つけて、何か  
に使えるかもって思ったので持ってきました」

「ふうん、そうか……」

妙に隠すような仕草が気になったが、どうにも身体の痛みが治まらない。再び横に  
なると、痛みに耐えられず私の意識は次第に遠のいていった。

そして気が付くと既に夜になっており、私達は荷物から見つけた硬い干し肉をか  
じりながら、今後のことを話し合うことになった。

「身体の調子はどうですか？」

「大分良くなった。もう一晩寝ればまともに歩けるようにはなるだろうな」

「ふふ、じゃあ明日になったら出発ですね」

「……なあ」

「はい？」

今まで触れずにいたが、そろそろ核心に触れねばなるまい。

「どうして、殺さなかった」

「……」

「お前はこれから死刑を執行されに行くんだぞ？ 動けない私を殺して逃げてしまえ  
ば、生き延びられるだろうに。なのにお前は私の手当てをして、出発の準備までして  
いる。一体何を考えているんだ？」

しばしの沈黙。そして、彼女がおもむろに口を開いた。

「なんていうか、しよくざい贖罪、かな」

「……贖罪？」

「これまで、私のせいであくさんの人が死んだのは事実だから。その罪は、償わなき  
やいけない、と思うんです」

確かに、彼女は命の他では償えないような大罪を背負っている。

国家反逆罪。それが、彼女の背負う罪の名前だった。

他の国と比べても、この国の政治はあまり褒められたものではない。故に、外にも中にも、王の首を狙う敵が居た。その中の敵の一つが、反政府組織『せき赤げつとう月党』であった。

彼らは革命の名の下に政府の軍と戦争を繰り返して、その度に各地で、軍人民間人問わず多大な被害者を出してきた。そしてその『赤月党』の象徴にして最高指導者こそ、クロエ・メリクールその人だったのだ。彼女はその天性のカリスマで組織をまと纏め上げ、まるで一つの生き物であるかのように完璧に統率してきた。その指揮能力は、彼女が居なければ政府側の被害者は今の半分で済んだのではないかと言われたほどだった。

「ああ。私だって、出来るのならばこの手でお前を斬ってしまいたいよ」  
この言葉に偽りは無い。私の両親も、革命とやらの犠牲者なのだ。  
ただ、彼女と居るとどうも調子が狂う。一見するとどうしても悪人には見えないから、憎しみを抱いていく先がわからなくなりそうになる。  
「わかっています。だから、私は、殺されに行くんです」  
悲しげで、それでも真っ直ぐな瞳に見つめられ、私は何も言えなかった。

翌日、歩けるまで回復した私は、クロエを連れて王都へと出発した。何があろうと、この女を断頭台まで送り届けるのが、私の果たすべき使命だ。

王都までは馬車で二日かけて向かう予定だったが、当然馬車はもう使えず、歩きで行くしかない。すると恐らく、一週間近くはかかるだろう。

こうして、私と死刑囚との不思議な旅が始まった。

まずは登れる場所を探して、元の道まで戻らなければいけない。少し探した結果、私達は岩場を見つけてなんとか登り、改めて王都へと歩き出した。

「とりあえず、森を抜けることを目標にする。道なりに進めば、二日程度で抜けられるはずだ」

「なんだかワクワクしますね！」

「……お前が先を歩け。道が分かれてたら私が指示する」

「えっ？ あっ、はい」

戸惑ったような顔をしているが、実際のところ腹で何を考えているかわからない。今は私とクロエしか居ないのだ。手枷を付けたままとはいえ、仮にも死刑囚に背中を見せて歩くべきではないだろう。

一昨日の大雨が嘘だったかのように空は晴れ、木々に茂る葉の隙間からは心地よい木漏れ日が降り注ぐ。彼女はその中で、まるでピクニックにでも来たかのように楽しげに歩いている。

「あ、こっち来てください！ 可愛い花が咲いてますよ！」

そんなことを言いながら歩く彼女の背中を見て、私の手は何度も剣の柄に触れたが、結局剣を握ることは一度も無かった。

王都に着くまで後一週間。私は何度こんな思いをしなくてはならないのだろうか。

歩いている内に次第に空は暗くなってきた。

私は彼女と話し合い、今晚はこの辺りで野宿をすることにした。先を急いでいるが、夜の森を歩くのは危険過ぎる。

携帯食糧を食べ終え、私は横になったクロエに背を向けて座り、時折爆ぜる焚火をただ見つめていた。

結局私は揺らいでいるのだ。両親を奪った大犯罪者が、人畜無害な女にしか見えなから。ただ、両親を失った悲しみも憎しみも、決して消えることは無い。あの時から胸に開いた穴は、埋まらない。だからこそ、彼女にはその罪に相応しい悪女であってほしかった。むしろ、そうでなくては困るのだ。そうでなくては、憎しみに彩られ半分死んだように過ごしてきた私のこれまでの人生が、全く意味を失ってしまう。実際のところ、それこそが私にとって一番怖いことなのかもしれない。

「あの……寝ないんですか？」

ぐるぐると出口の見えない考えを巡らせていると、てっきり寝たものと思っていたクロエがおずおずと後ろから話しかけてきた。

「寝るさ。お前が寝た後に、ここでな」

と、私は振り返ってぶっきらぼうに答えた。

「じゃ、じゃあせめてこの毛布を……」

「触るな」

彼女は毛布を私の肩に掛けようとしたが、私はその手を反射的に払いのける。見た目がどうであろうと、未だ彼女への嫌悪感は強い。

「ごめんなさい……」

「言っておくけど、私はお前と馴れ合うつもりは無い。私は、お前達の革命とやらの両親を殺されてるんだ」

「……っ！」

その言葉に、彼女ははっと口を覆う。その姿に、私はわずかに苛立ちを感じた。

何を今更。全部お前達が散々やってきたことだろうに。

「いいからもう寝ろ。明日中には森を抜きたいんだ」

それから私は再び彼女に背を向け、後ろから寝息が聞こえてくるまで剣を抱いて、ただ座り込んでいた。

結局、大して眠れないまま日が昇ってしまった。兵士として訓練してきたのだから体力にはそれなりに自信があるが、寝不足でクロエと接するのはなんだか心許ないような気がした。気を引き締めなければいけない。

やること自体は昨日とそうは変わらない。お互い森の中の道には慣れてきたので歩く速度は若干上がっているし、道も基本的にはわかりやすい馬車道を通るので、日が完全に落ちる前には森を問題無く抜けられるだろう。

暖かな日差しに包まれて、クロエの軽やかな足取りで歩く背中をぼんやりと眺めていると、段々まぶたが重くなってきた。行軍訓練では気を張り詰めていたのでこんなことは有り得なかったが、こう順調で何も無いとなると、昨夜の寝不足が響いてくるようだ。

「ずっと黙って歩くのも何ですし、話でもしませんか？」

睡魔と闘うことにその意識の三分の一を割いていた私の頭に、彼女の朗らかな声が飛び込んできた。

「話？」

昨日話したことをもう忘れたのだろうかこいつは、などとぼんやり思いながら私は聞き返した。

「はい。昨日の夜、あなたのご両親のことを少し聞いてしまったので、お詫びに私も自分の話、しようと思ひまして。何か聞きたいことはありますか？」

一気に意識がまどろみの海から引き上げられた。

一体どういう理屈でそのお詫びになるのかはわからないが、それどころではない。

聞くとすれば、反逆者として名を馳せた彼女の身の上話だろうか。私の両親が巻き込まれた事態ということもあり、興味が無いと言えば嘘になる。

それに彼女の話は、私がああ火の海に置いてきてしまった何かを取り戻す手助けになるかもしれない。だが同時に、それを聞くことで彼女に抱く葛藤が余計に悪化することが明らかであるようにも思える。この選択は一種の人生の分岐点とも言えるだろう。

私は今、きっと沼の前に居るのだ。沼の中央には小さな浮島があり、そこには私が求めるものがある。しかし、それに近付こうと進めば進むほど、沼の底に沈んでいき、抜け出すのが難しくなっていく。浮島まで辿りつけてもその時には既に、求めたものには手が届かないほど深く沈んでいる。それでも、好奇心という名の獣はどうしようもないほどにそれを求めているのだ。それが本当に良いものなのかどうかもわからずに。

そして、私が沼を前にして選んだのは、

「お前は、どうして赤月党に居たんだ？ 一体何のためにあれだけのことをやってき

たんだ？」

前へ進むこと。そして、沼に足を踏み入れること。

王都の片隅、ゴミ溜めのように汚れた区画に、彼女は生まれた。

そこは身体の一部を失った者や薬物中毒者、浮浪者やごろつきなど、社会から爪弾きにされた者達が半ば押し込めるように集められた区画だった。王都の中にありながら町並みは荒れ果て、血の流れない日は無い。外側の人間にとって、ここは王都の汚点であり、存在しないものとして扱われてきた。彼女の生まれた街は、そういうところだった。

父は物心付いた時にはもう居なかったが、母は酒場で働きながら懸命に育ててくれた。お陰で、少女は幼いながらも聡明な子供であった。

少女は母に、人を信じることと、誠実であることを教わった。その教えは、地獄の体現であるようなこの街では、食べ物にされる危険を更に増やすようなものでしか無かったが、彼女は母の言う通り誠実であろうとしたし、常に人を信じていた。だから彼女は、周りから隔離された、どこにも希望など無いその街においても、決して世界に絶望することは無かった。

しかし、この国を動かす真っ黒な歯車は、一人の少女の想いなど関係なく回り続ける。

ある日、この区画の取り潰しが決まった。

最近建て替えられた新しい王宮の窓からはこの区画がどうしても目に入ってしまい、とても見苦しい。それが理由だ。

この街は、王都で生きられなかった人々の受け皿だ。だからこそ、ここが取り潰されてしまうともはや彼らが生きていける場所は王都には無くなる。他の街へ行こうにも、旅するのに十分な路銀や食糧すら持たない者も多く、そもそも身体が悪く長い距離を歩けない者も少なからず居るのだ。

当然反対運動も起き、警備隊と反対派の小競り合いによって死者が出ることもあった。

しかし、工事が中々進まないことに業を煮やした国王は、ついに軍の一部を動かして強制立ち退きに乗り出した。装備を整えた屈強な兵隊に雑多な武器を握り締めた烏合の衆が勝てる訳も無く、軍が動いてから三日足らずで立ち退きは完了した。

その三日足らずの間で多くの人が死に、少女の母親もまた、争いに巻き込まれて命を落とした。

天涯孤独の身となった少女も含め、生きて区画を退去した者の多くは、王都の外に逃げ延びて他の街を目指した。たどり着ける保証は無かったが、王都を追われた彼女らにとって、それ以外の道もまた無かった。

そして、死なずに目的地まで行けるかわからない旅を始めた彼女らの前に、赤い布を身体の各所に巻いた男達が現れた。

まだ組織と呼べるほど大きくもなかったその集団は、反政府組織『赤月党』を名乗っていた。王都で理不尽な立ち退きがあったと聞き、逃げ延びてきた人々を自分達に取り込むべくやってきたのだろう。そして、加勢もせずに王都の外で待ち構えていた。弱者の救済という思想は立派だが、赤月党とはそういう組織なのだ。

しかし、飢えて死ぬのを待つだけの彼らは、十分な物資だけは持っていた赤月党に拾われる以外を選ぶことは出来なかった。それは少女も例外ではなく、初めは後方支援を行う非戦闘員として迎えられることになった。

赤月党に入ってしまったら、次第に少女の才能が頭角を現し始めた。ある村で行われた政府軍との抗争の際に、幹部の食事を用意するために臨時司令部を出入りしていた少女が、政府軍の増援が来る位置をピタリと当ててみせたのが最初だった。机上に示された戦況を見た少女が幹部との何気ない会話の中で、ここに敵が来ないのはおかしいと示した場所に試しに斥候を遣わせたところ、まさにその場所に増援が現れたのだ。

少女の才能の片鱗を見た幹部達は、戦時非戦時を問わずに度々少女の助言を仰いだ。少女はその度に的確な助言をし、徐々に赤月党は勢力を伸ばしていった。

本人はただ生きてかっただけでも、少女には組織を率いる才能があったのだ。

次第に、少女は赤月党の中で祀り上げられるようになった。天性のカリスマに、人並み外れた才能。組織のシンボルに仕立て上げるには最適だったのだろう。

少女はついに最高指導者となり、組織は成長を続けていった。傍から見れば望まぬままに膨大な権力と責任を背負わされた形であったが、母の教え通り人を信じることを辞めなかったその少女は、これで世界が良くなるのならと最高指導者の椅子に座り続けることを選んだ。

しかし、そんな時に転機が訪れる。勢力を伸ばした赤月党が、国にとって最大の脅威であると認定され、全面戦争に突入したのだ。

少女自身は避けるべきだと主張していたが、緒戦の勝利に味を占めた幹部達は、今こそ国を打ち倒す時だと考えていた。そして、この齟齬が少女の運命を大きく変えることになる。

赤月党の討伐に全力を注ぎ始めた政府軍に真っ向から戦いを挑んだことにより、赤月党の勢力は徐々に削られつつあった。いくら一大勢力とはいえ、ただの民間組織が一国の軍隊を直接打ち破る力など持つはずが無いのだ。

そして少女は、赤月党の命運をかけたある一大勝負で、切り捨てられた。

赤月党の持てる全てを賭けたその戦いで政府軍に押されていることを察した古参の幹部達は、革命の象徴である少女をおとり囮として敵戦力を集めるために、彼女の居場所をわざと敵に流したのだ。

赤月党の快進撃がその最高指導者によるものだという事は既に周知の事実であったため、目論見通り政府軍はその戦力の大部分を彼女の捕獲に向けた。そして革命軍は、見事その周りを更に包囲することに成功したのだ。

簡易司令部として使っていた廃屋に大量の兵士が雪崩れ込んできた時、何も知らなかった少女とわずかな護衛は、抵抗すら出来ずに取り押さえられた。その時少女は初めて理解した。自分は彼らにとって便利な道具に過ぎなかったのだということ。

すると、廃屋の外で兵士達の悲鳴が響き、熱気と焦げるような臭いが廃屋の中に充満し始めた。集まった兵士に火矢を一斉に射掛けて、政府軍を少女ごと焼き殺す計画だったのだ。

全てを察して我に帰った少女は、はっきりとした口調で、政府軍の兵士に対して逃げるための指示を始めた。初めは畏を疑って信じなかった兵士達も、炎に囲まれて他にすが縋るものが無いとわかると、一時的にその指示に従って包囲を突破する腹積もりを決めた。

完璧な指示だった。この包囲陣形も、火矢の使い方も、以前に少女が作り上げた戦術の一部である。よって包囲の隙を突く方法も、彼女は知り尽くしていたのだ。

かくして世界最悪の犯罪者は逮捕され、死刑を宣告されたのだ。

「これが、私の知る全てです」

彼女の語ったその半生は、まさに想像を絶すると表現するのが相応しいものだった。しかし、私はそれを聞いて少し安堵していた。

両親を失ったあの夜の、炎に包まれた村の記憶。その惨劇は長年私を苛み続けてきた。しかし、彼女の話を知ったことで認識することが出来たのだ。当時彼女達は自分達なりの理由や大義があって戦いを繰り返し、それに巻き込まれて両親が死んだという客観的事実を。それがひどく理不尽なものではあっても、原因があって結果があるというこの冷たくて合理的な世界の仕組みに、ようやく両親の死を当て嵌めることが出来たのだ。

「あの、どうかされましたか？」

思考の海に浸っていると、突然クロエの顔が眼前に現れた。

「うわっ！ ……な、なんでもない！」

驚いた私が一歩飛びのくと、彼女はまた顔を近づけて不思議そうに私を見つめる。

度々思っていたが、この女は人との距離感の取り方がおかしいのだろうか。

「ならいいんですけど……。ま、とにかくお互いのことを知れた訳ですし、これで私達は友達になれましたねっ」

無駄に完璧なウインクを飛ばしてくるクロエを見て、一気に肩の力が抜けた。せつかく真面目に悩んでいたのが馬鹿みたいに思える。

「ほら、話は終わりだ。訳わからんこと言っていないでさっさと歩け」

「そんない」

いつの間にか横を並んで歩いていた彼女を再び前に進ませてふと見回すと、周りの木がまばらになっているのに気付いた。話している間に森を抜けていたようだ。

日も傾いてきているところを見るに、案外長い間話し込んでいたのだろう。

空ではすっかり夜のとぼり帳が下ろされ、私は焚火の前でのんき暢気に携行食糧を食べるクロエを、何をしてもなく見つめていた。彼女が手を動かす度に、色白の手首に付いた痛々しい痕が手枷の間からちらつく。

この旅を始めた時、予想とはかけ離れた無邪気な振る舞いに驚いたものだが、もしかしたらこれが彼女の本当の姿なのかもしれない。もし彼女が普通に生まれていれば、革命の象徴でも最悪の犯罪者でもない、普通の女でいられたのだろうか。

だが、彼女の話を知れば、劣悪な環境にあっても人を信じ続けた彼女は、人々の求める革命の理想などという、あまりに重い荷物をただ一人で背負ってしまった。更に悪いことに彼女の人並みはずれた才能は、その役を見事に演じきることを可能にしてしまったのだ。

恐らく、私が接してきたような無邪気な姿を晒したのは、本当に少女の頃以来だろう。クロエ自身の人生は、人々の期待など背負っていなかった少女の頃で止まっていた、実際の歳よりどこか幼く見えるのはそれが理由なのかもしれない。ようやく人々の期待から解放されて彼女自身の人生を再開できたのが、断頭台に向かう旅の中というのは皮肉な話だが。

そろそろ、潮時かもしれない。

「ちょっと手出せ」

「手？」

突然のことに戸惑って聞き返すクロエに、私は小さな金属片を放った。

「えっ、ちょっ」

慌てて受け止めた彼女の手の中には、手枷の鍵。

「あの、これって……！」

「それ外しとけ。ここまで歩いてきてわかったが、足手まといを私一人で世話しながら旅するのは面倒だ」

これは、本当のことだ。

実際に、彼女は手枷を付けることでいちいち動作がまごついており、出来ないことがあれば私が手助けしなければならなかった。先を急ぐ旅路でこれでは時間の無駄だ。逃げられる危険が増す選択でもあるが、私はあえて時間を優先した。

そもそも彼女は事故後、逃げようと思えば簡単に出来たのに、それをしなかった。話を聞いて同情した訳ではないが、そんな彼女を少し信じてみたいと、そう思えたのだ。

「いいん……ですか？」

鍵を握り締めて彼女がおずおずと尋ねる。

「別に。代わりにお前にも荷物半分持たせるからな」

「はい！」

結局彼女は自分でうまく手枷を外せず、私がやってやらねばならなかった。

二人旅を始めてから三日目の朝が訪れた。

「昨日は森を抜けてから平野を少し歩きましたけど、今日もずっとこの平野を歩き続けるんですか？」

「護送任務に就いた時にこの辺の地理も少し地図で見ておいたんだが、この道の先に小さな村がある。馬車からお前が拾ってきた分の食糧とかがそろそろ無くなる頃だからな、今日はそこを目標にして歩くぞ」

「じゃあ三日ぶりに平らなところで寝られるんですね！」

彼女は当然のように私の隣を歩いている。



本当なら前を歩かせるべきなのだが、昨日の話を考えるとどうにも言う気が起きなかった。彼女への憎しみが消えた訳ではないが、その短い生涯の更に短い間くらい、対等に隣を歩く人間が一人居てもいいだろうと思えたのだ。

青い空にはゆっくと大きな雲が流れ、心地よい日差しが空気を暖める。

先日から歩いてきた平原から少し風景が変わり、辺りには小さな畑や家屋がぽつぽつと見られるようになってきた。私達が抜けてきた森とこれから目指す村は案外近いのかもしれない。

田舎道を歩いていると、牛を連れた老人とすれ違った。牛を連れてどこへ行くのかは知らないが、この先にある村の住人なのだろう。

彼は素朴な笑みを浮かべて私達に挨拶してそのまま去っていったが、恐らく私達が、王都をしんかん震撼させた重犯罪者の護送中であるなどは露ほども考えていないだろう。もしかしたら姉妹の二人旅にでも見えていたかもしれない。

と、ここまで考えて思い返してみれば、「姉妹に見えるかも」なんて思考はこの旅が始まる前の私では有り得なかったものだ。

あの頃の私は、両親の死の記憶に縛られ、当時や今の人々の多くがそうであるように、赤月党のことを憎み、嫌っていた。当然その最高指導者であるクロエも、死刑になって当たり前だとまで考えていた。

ただ彼女と出会い、実際に関わり合い、会話し、彼女の生涯を聞いたことで私の心境に変化が生まれた。

懸念はしていたのだが、必要以上に関わりあったことで多少なりとも情が移ってしまったのだろう。親の仇でありながら、どうしても考えてしまうのだ。『クロエはこのまま殺されていいのだろうか』と。

この葛藤は、自分で選んだものの代償だ。いずれどこかで答えを出さなければいけないだろう。

段々人通りも多くなり、薄暗くなった道の先に星のような村の明かりが二つ三つと増えていった。村まで後少しだ。

「なんとか夜までに着けたな」

「なんだかすごく久しぶりに人里に来た気がします……」

夕食前なのか、並んだ木組みの家々から炊事の煙が昇り、家の前を通るだけでいい香りが漂ってくる。規模こそそこまで大きくないが、暖かくて村人達の活気が感じられる村だ。

まずは今夜の寝る場所を確保しなくてはならない。

私は周りに居た適当な村人に話しかけ、宿の場所を聞いた。

外の人間が珍しいのかまと纏わりついてくる子供達を適当にいなしながら、聞いていた宿屋に向かう。ちなみにクロエは子供と手を繋いで楽しそうに会話をしているようだ。先ほどの老人と同じく、子供達は彼女の正体など知る由も無いのだ。

宿に入って部屋を取った時も主人にも特にとが咎められず、何も無い村だがゆっくりしていってくれと歓迎されてしまった。

考えてみれば当然のことだ。

彼女は赤月党では表に出ることなく指揮を執っており、戦場で罠に嵌められて捕まった時に初めて顔を見られたのだ。彼女の顔など裁判に関わった人間くらいしか知らず、王都で彼女を待つ処刑人ですら、裁判の際に書かれた大雑把な人相書きを持っているだけであるはずだ。

クロエを恐れた国は、いち早く処刑するために逮捕から裁判、王都への護送を極めて迅速に手配した。更に、悠長に肖像など描かせたり広報する手間すら省いたため、通常の犯罪者に比べ情報の精度は低くなっている。末端の国民になればなおさらで、政府の広報があまり無い以上、まともな情報は行き渡り辛い。国に反旗を翻した組織の最高指導者の正体が小柄な年若い女性であることすら知らない人の方が多いだろう。

クロエ・メリクールは、その名に反して顔は意外と知られていないのだ。

宿に併設された小さな食堂で夕食を済ませた私達は、先ほど取った部屋に二人で泊まることとなった。欲を言えば一部屋ずつ取りたかったが、金銭的な問題以前に、護送中の死刑囚を一人にしておく訳にもいかなかったのだ。

ベッド二つに小さな書き物机と椅子が一セットという簡素な二人部屋だったが、このところ野宿が続いていた身としては十分に快適な空間だった。

「ここって、なんだかのんびりしてていい村ですよ」

ベッドに寝転がったクロエが顔だけをこっちに向けて話しかけてきた。

「ああ。昔いた村も、こんな感じのところだったな……」

郷愁を感じて思わず漏らしてしまった一言に、彼女はベッドの上で私に向き直る。

「そういえば、生まれた村を出た後は、どうしていたんですか？ 何故軍隊に？」

「……確かに、お前の話を聞いておきながら私自身は『両親が死んだ』ということくらいしか話してなかったな」

お前みたいに大した話は出来ないが、と前置きをして、私は自分の思い出をかいつまんで話してやった。

「私が十歳くらいの頃、何でかは知らないが赤月党の連中が村に潜伏してたことがあった。村の人達も国のやり方はあまりよく思ってなかったから、そいつらを村にかくま匿うことにしたんだ。だが国にばれていたらしく、ある日政府の軍が押し寄せてきた」

「戦争に……なったんですか？」

「まあな。それに巻き込まれて両親が死んだ後、独りになった私は別の村で葡萄酒の醸造をやっていた祖父母に引き取られたんだ。それから、成長した私は食い扶持を自分で稼ぐために軍隊に飛び込んだ、というだけの話だ」

いざ話してみれば、案外普通に話してしまえるものだ。両親の死は、私の中ではもう過去の出来事としてある程度は処理できるようになったのかもしれない。

ここまで話して、私はクロエの様子が少しおかしいことに気付いた。

「おい、どうした？」

「私、私……、あなたの生まれた村、多分知っています」

「知っている？ どういうことだ」

「私が赤月党に助言し始めた時、地方にある政府軍の訓練施設を偵察する計画があったんです。その間に偵察兵が滞在する場所として、私が推薦したのがあなたの村なんです」

「それは……どういうことだ？」

「つまり、私のせいで、あの村での戦闘が……」

「いや、言わなくていい。別にお前をここで責めたところで両親が帰ってくる訳じゃない」

話すほどに表情を暗くしていくクロエを見ていられず、私は反射的に彼女の言葉をさえぎ遮った。

両親を失った悲しみも怒りも本物だ。ただ、それをそのまま彼女にぶつけてしまっ  
ていいのだろうかと思ってしまうと、この場で彼女を責める気にはなれなかった。

翌朝、私はとても心地よく目覚めることが出来た。最近では岩や土の上でしか寝て  
いなかったのですと身体の節々が痛かったが、そうした疲れが一気に解消された気  
分だ。

「んん……」

隣のベッドに顔を向けると、未だ惰眠をむさぼ貪っているクロエが見えたが、顔色  
はいつもより更に良さそうだ。この調子なら今日は予定より遠くまで行けるかもし  
れない。

私は幸せそうに眠る彼女を容赦無く叩き起こし、食糧など必要なものの買い足しを  
するために、共に宿を出た。

出来ればもう少しゆっくりしていたかったが、そろそろ出発しなくてはならな  
い。ただでさえ本来馬車で行くところを徒歩で行っているのだから、時間はなるべく  
浪費するべきではない。

だが、私は正直迷っていた。このまま彼女を断頭台に送っていいのだろうか、と。

この先彼女は、衆人環視の中、大勢の憎しみに囲まれてその首を落とされることになる。仮にも国を揺るがした反政府組織のしゆりよう首領だ。その亡骸は死者として尊厳を持って扱われることは無く、見せしめとしてしばらく首をさら晒されるのだろう。

そんなところに、私は彼女を送り届けることが出来るのだろうか。

ただ、ここで逃がしたところで大規模な捜索が行われることは目に見えているし、何より彼女が裁かれるべき罪を負っているのは確かなのだ。

私はまだ、答えを出せそうに無い。

空は、初日の大雨が嘘のように晴れが続いている。二人の体調も万全で、今日も順調な旅が期待できるだろう。私がかうだうだと悩んでいる間にも、着々と目的地の王都は近付きつつある。

歩いている内に、周囲の風景が徐々に変化していく。さっきの村の周りは草原のようになっていたが、今は辺りに岩や石が増え、逆に植物の緑が少なくなっていた。土の水はけが悪いようで、所々ひび割れた大地がその肌を晒している。褐色の大地が太陽の光を照り返し、私達の肌にはうっすらと汗がにじ滲んでいた。

クロエは岩や地面しか見えない風景に若干退屈そうではあったが、石の転がる足場の悪い道に文句も言わず、軽快な足取りで歩んでいた。

しばらくすると前方にごつごつとした岩場が広がり、更に奥には切り立った岩山も見える。そこまで大きな山ではないが尖った大岩の集まりであり、馬車道は周りの岩場も含めて大きく迂回するように曲がっている。

村で貰った地図が正しければ、奥の山を形作る大岩の間を縫うように細い道が走っており、さほど勞せず山を抜けられるはずだ。本来は迂回する道を馬車で通って行く予定だったので、ここを徒歩で突っ切れば大きな時間の短縮になるだろう。こういうところだけは徒歩ならではの利点と言える。

「わわっ」

「おい、大丈夫か？」

岩場で足を取られて転びかける彼女の腕を、私はとっさに掴んで助け起こした。私の中では、もはや彼女の隣を歩くことへの抵抗感は消え失せていた。

岩場を越え、山の中に入る。

切り立った岩壁に隠れて見えなかったが、山中の細道は崖の底のようになっており、大人が三人並んで歩けるほどには広く、斜面も大して急ではないようだ。

迷わないように地図を片手に、私達は順調に崖の間を歩き続けた。

突然、クロエが足を止めた。驚いた私が彼女に目を向けると、さっきまでとは打って変わって口を真一文字に結んだ横顔が見えた。その表情は何かを警戒するかのようになり、緊張をほら孕み、目はゆっくりと辺りを見回している。

遅れて、私も周囲の異常に気が付いた。

私達以外の足音や衣服がこすれる音が岩肌に反射してわずかに響いているのだ。それも少数のものではなく、剣か何かを腰に下げているような金属音まで聞こえる。まず、ただの旅人とは考えられないだろう。

足音からするに恐らく十人程度。中々到着しない死刑囚に業を煮やしてやってきた王都の迎えか、はたまた彼女、および赤月党に恨みを持つ何者かが私達のどうい道程を掴んで追ってきたか。

前者ならいいが、後者なら最悪戦闘に発展する恐れがある。私は彼女の横で立ち止まり、腰の剣に手を添える。

足音が近付いてきた。さっきは気付かなかったが、後ろからも五人程度の足音が近付いてくる。わざわざ後ろからも挟んでくるということは、前者は考えにくい。

総勢約十五人。相手がただの物盗りであっても、普通の旅人の格好に剣一本という風体で勝てる相手ではない。

一人で逃げるだけなら出来ようが、この状況から彼女を五体満足で連れ出すにはどうしたらいい？ 必死で頭を回して考えるが、そうする内にも無慈悲に足音が迫る。

「……いつでも走れるようにしておけよ」

「いえ、多分その必要はありません」

「何？ それはどういう……」

その瞬間、目の前の岩陰から男達が姿を現した。

彼らはナイフや長剣などばらばらな武器を腰に下げ、身体はどこかに赤い布を巻きつけている。赤月党の構成員だ。

赤月党の残党による、最高指導者クロエの奪還。当然考慮しておくべき事態だったにもかかわらず、全く想定していなかった。いや、私が彼女と必要以上に馴染んでしまったことで、護送対象である彼女自身が私から離れようとする危険性を、無意識で排除してしまっていたのかもしれない。

どのようにして彼女を連れて逃げるかばかり考えていたが、守るべきクロエが彼らの味方であるなら、私にはもはや為す術が無いのだ。

「一体何の用だ？」

私は剣に手をかけたまま、いつでも動けるよう気を張り詰めて彼らに尋ねた。答えなど分かりきっているが、今は打開策を練るために一分一秒でも考える時間を稼がなくてはならない。

「同志クロエ、お迎えに上がりました。赤月党に戻り、もう一度我々を導いてください」

彼らの内真ん中の一人は、質問をした私を無視して彼女にぎょうぎょう仰々しく話しかけた。

彼女は答えること無く、じっと彼らを見定めるようにして動かない。

「一体どうやって嗅ぎ付けやがった……！」

再び私が問いかける。今の彼女に話すタイミングを与えたくなかったのだ。

「王都への到着が遅れているという情報を得てな。露払いしつつ手分けして道筋を辿ってきたところ、貴様らが岩場に入るところを見つけたのだ。まあ政府の犬程度に我らのあつ篤き忠誠心など、到底理解できんだろがな」

露払い……。通りで王都からの搜索隊が来ない訳だ。速やかに彼女を処刑したい政府は、予定日に到着しないとすれば当然兵士を遣わせたのだろうが、目的が違うとはいえ赤月党も考えることは同じだったということだ。

「そうかい。なら何故彼女を囮にしておいて今更……」

私がまたもや時間稼ぎのため質問をぶつけようとした時、今まで動かなかったクロエが黙ったまま彼らに歩み寄った。

結局、私に彼女を止めることは出来ないのか。彼女が言った『贖罪』の言葉は、結局偽りだったのか。

「さあ帰りましょう。我らの闘争へ」

男達に歓迎されている彼女の背中を見て、私は再び腰の剣を握った。

クロエの才能を考えれば、彼女を赤月党に帰すことの脅威は計り知れない。もう一度彼女が軍を率いて立ち上がれば、あの凄惨な戦いが繰り返されることになりかねない。国のために思うなら、ここで後ろから彼女を斬り殺すのが最適解なのだ。私一人なら包囲を抜けて逃げることで出来ははず。後で状況を説明すれば、処刑を待たず殺したことに於いて私が罪に問われることは無いだろう。

だが、私の手はそれ以上動くことは出来なかった。

私は彼女の素顔を垣間見て、その思いを聞いてしまっている。確かに、語った言葉は偽りだったかもしれない。だが、それでも、どうしてもその心だけは本物だと思えてならなかったのだ。

だからこそ、彼女にはこんな形で死んでほしくない。私の使命と反するその願いは、剣を握る私の手を、万力のように固く締め付けてしまっていた。

しかし、私にとって全く予想外の事態が起きた。

彼女は彼らに何かを言うとそのまま振り返り、私のところに歩いて戻ってきたの

だ。一方男達は信じられないといったような表情で彼女を見送っている。

「まっ、待ってください！ 我々にはあなたが必要なんだ！」

リーダー格と思わしき男が必死に彼女に呼びかけるが、

「帰ってください。これは、私のみそぎ禊の旅なんです」

彼女は冷たく言い切って取り合おうとしなかった。

赤月党に戻ったと思ったクロエが逆に彼らを切り捨てて帰ってきた。私が動けない内に状況は次々と移り変わっていく。私は状況をまるで理解できず、ばくぜん漠然とそのやりとりをただ眺めることしか出来なかった。

まだ何か言いたげな男達の横を、彼女は私の手を引いてすり抜けていった。

「どうか、私の贖罪の邪魔を、しないでください」

彼らに背を向けたままいちべつ一瞥もくれずに念を押した彼女に、手を引かれる私はどこか冷たささえ感じた。

「どうしても、ですか……？」

背後で金属がこすれる音が鳴る。

「あなた達……！」

振り返ると、そこには武器を構えた男達。空気が一気に緊張し、私も再び剣を構え直す。

最悪の事態だ。あのまま見逃してくれるのが一番良かったのだが、そうはいかないようだ。彼らの表情にも必死さがにじみ出ている。

「あなたには生きてもらわなければならない。あなたが居なければ、赤月党はこのまま消えてしまう！ 我らの理想が、ここでつい潰えてしまう！」

彼女の言葉を信じるなら、赤月党の成長はクロエ・メリクール一人に依るところが大きい。彼女が逮捕されたことで勢力を維持できなくなり崩壊しつつある赤月党にとって、この機会を逃せばもう先が無いのだろう。

だが、当然返す訳にはいかない。戻らないのが彼女の意思ならなおさらだ。

焦る頭を回して私は考える。一対十五、勝てるはずが無い。幸い挟み撃ちではなくなったから、足止めできればなんとかなる……かも。いや、無理だ。二、三人削った程度では彼女を連れて逃げられない。

取り得る選択肢が頭の中でことごと悉く否定され、次第に心が焦りと絶望に塗りつぶされていく。

その時、クロエが口を開いた。

「理想は、確かに共感できるものでした。ただ、やり過ぎたのです、私達は。今だってそう。結局暴力に頼るしかなくなる」

張り詰めた空気の中に、彼女の凜とした声が響く。

「しかし、こうしなければ何も変えられない！ 赤月党とあなたの力無くして国は動かせない！」

剣を握り締めたまま、リーダー格の男が搾り出すように叫ぶ。それは、悲鳴にも似ていた。

「私達が今まで戦えてきたのは、国の鈍重さと、虐げられる国民達の支持があったからです。でも、私達は殺し過ぎてしまった。もう国民にとってはただの殺戮者であり、虐げる側に回ってしまったのです。そして国は力を付け過ぎた私達を、全力を以て当たるべき敵と認識した。国民の支持無くては、私達の暴力はより巨大な暴力に押し潰されるだけです」

彼女はれいげん冷厳で、それでいて自嘲が籠ったような眼差しで彼らを見つめる。

「それでも、あなたが居れば！」

「駄目です。国はもう、赤月党とクロエ・メリクールを決して許しません。その影でも見えればどこまででも追いかけてくるでしょう。そうなった以上、赤月党はもはやこのまま朽ちるに任せる他無いし、私が居てもかえって危険になります」

「ならば、ならば俺たちは……」

彼は剣を下ろし、震える声で彼女に縋る。もはやその姿に、かつて国を脅かした反政府組織の面影は無い。そこに居るのは、絶望を抱えた無力な若者だった。

そんな彼らに、彼女は悲しげで乾いた微笑みを向けた。

「赤月党はもう捨ててください。それでもまだ国を変えたいなら、別の形で、自分達で一から始めればいい。私はもうただのちっぽけな人間で、あなた達を導くことは出来ない。私に出来るのは、ただ罪を償うことだけです」

彼らは、もう何も言えなかった。

彼女は再び彼らに背を向け、私の手を引いて歩き出す。決して振り返らずきぜん毅然とした足取りに、私は黙って着いていくしか無かった。その背中からは、悲壮なまでの決意と、あまりに深いざんかい慙悔の念が痛いほどに感じられた。

そのまま岩山を抜けると、結局彼らはそれ以上追ってくることは無かった。実力行使に出たとはいえ最後には引き下がった辺り、再び彼女を利用しようと企むかつての幹部達の遣いではないのかもしれない。彼女が切り捨てられた時にどうしていたかはわからないが、少なくとも本気で彼女に付き従うつもりだったであろうことだけは顔つきからわかった。

そんなことは、同じ組織にいた彼女の方が十二分にわかっているだろう。だが、それでも彼女は助けられることを拒絶し、自ら殺される道を選んだのだ。

その日の夜、私達は岩場をすんなり抜けられたお陰で予定より先に進めたので、再び合流した馬車道の近くで野営を構えた。昼の騒動で彼女の真意がわからなかった私は、この機会に直接彼女に聞くことにした。

「なあ、ちょっといいか？」

「はい？ 何ですか？」

「昼の時、赤月党の奴らがお前を助けに来たのに、何で行けなかったんだ？ あそこでお前が承諾してたら死刑から逃れられただろうに」

「あの時ですか……。うーん、なんていうか……」

彼女は夕食の一片のチーズを手に、目を閉じてうな頷っている。こんな状況ではあるが、その様子は少し可愛らしい。

「なんていうか、そのままなんですよ。今の私には何も出来ませんし、当時兵士達に指示を出していたのは私ですから、捕まった以上その罪は裁かれなきゃいけない」

「殺されるのは自分なのに、怖くないのか。お前自身はそれでいいのか？」

「……そりゃあ、死にたくは無いですよ」

しばしの沈黙の後、彼女は顔を伏せて搾り出すように言った。

「でも、皆同じなんです。私のせいで死んだ人達も、皆死にたくなんて無かったはずなんです。それを私達は私達の都合で殺した。だから、死者達のとむら甲いに命を捧げるのなら、私は最高指導者としてそれを受けなきゃいけないんです」

私は、彼女がその細い肩に全てを背負おうとしているように思えてならなかった。周りに半ば無理やりまつ祀り上げられて就いた地位でありながら、これまで率いてきた責任者として、組織に向けられた憎しみの全てを自分一人で受け止める覚悟をしているのだ。

私と変わらないくらいの歳の女がそんな悲痛な覚悟を決めなければいけないことに、胸が締め付けられる思いだった。

「まあ、あなたとの旅が楽しいから、ここで辞めたくなかったっていうのもありますけどね！」

と、彼女はその場に仰向けに寝転がって、重い雰囲気振り払うように明るく努めて言った。

私も、その隣で寝転がって星空を見上げた。真っ黒な布の上に散りばめられた、白く輝く砂粒が視界を覆いつくしている。

夜空を美しいと思ったのは、両親を失って以来初めてだった。

「……私も、楽しいよ。お前とは」

呟いたその一言は、彼女の耳には届かず、そのまま夜の闇に溶けていった。

また夜が明けた。

今日もやることはこれまでと変わらない。ただ足を動かして、王都へと向かうだけ。何日も前から私達がやってきて、これからもやるべきことはただそれだけだ。

ただ、その中で私達の関係は変わり続けてきた。

最初は彼女に命令して前を歩かせた。次は隣を歩いていた。昨日は彼女に手を引かれた。明日の私はきっともう、彼女を断頭台へ送れないかもしれない。

そんな感情はなるべく表に出さないようにしながら、私は彼女を連れて旅を再開した。もう、終わりはすぐそこに迫っている。

「このまま道なりに歩いて行けば、大きな街に着くはずだ。今まで随分歩いてきたが、そこに着けば徒歩の旅も終わりになるだろうな」

「終わりってどういうことですか？」

彼女は私の言葉に目を丸くして聞き返した。

「王都ほどじゃないが大きい街だからな。馬車を用意するくらい簡単だろう。あそこから馬車で王都に向かえば半日とかからずに着く」

「そうですか……。仕方ないことですが、終わるとなるとなんだかちょっと寂しいですね」

死を覚悟しているとはいえ、いざ最後を意識するとやはり何か思うところがあるのだろうか。彼女は寂しそうに細めた目で風景を改めていつく慈しむように眺めている。

死刑囚との最後の旅路。私にとっても、これはやはり特別なものになるだろう。

周りは昨日の乾いた大地から再び緑豊かな林に変わり、彼女はまるでこの旅を始めた初日のように楽しげに歩いている。ただしあの時と違うのは、彼女が隣を歩いていることであり、私が彼女との会話を楽しんでいることだった。

美しい花や奇妙な模様の虫、空から歌声を響かせる小さな鳥に道を横切るうさぎ。彼女はそんなありふれた自然をいちいち子供のように喜び、その感動を共有しようと私にしきりに話しかけてくる。落ちて砕けた枝や葉の混じった柔らかい土をざくざくと踏み歩く音が耳に心地いい。

私は、そんな彼女との会話が心底楽しかった。

朝露に濡れる葉に、抜けるような青い空を流れる白い小さな雲など、見る光景自体は一日目の森と、木々の深さ程度しか違いは無い。

だが、今の私にとって、それら全てが全く新しく、輝いて見えていた。

少なくとも私はそう感じようと努めていた。最後の旅を精一杯楽しむために。

私達は歩いている間、本当の友人や、姉妹のように話をしていた。

話す内容は本当に取りとめも無いことだった。街に着いたら何をしたいとか、どんな服を着てみたいとか、好きな食べ物のこととか、普通の女達が日常の中で話すような、そんなありふれた会話。

だが、祖父母の家を出てすぐ軍の訓練所に入った私や、指導者としての姿のみを求められてきた彼女にとっては、そんなありふれた会話すら初めてのことだった。

街に近付いていくにつれて道は整備され、格段に歩きやすくなっていく。それはつまり、旅が終わるまでの時間が早くなるということの意味する。

時間というものは充実すればするほどに短く感じるものだ。

街に着くまでの間を精一杯楽しもうとした私も例に漏れず、これまでの長い旅は何だったのだろうと思えるほど、時間の経過は残酷なまでに早かった。

太陽が西に大きく傾く頃、私達は小高い丘の上に立っていた。そしてこの先下り坂になっている道の向こうには、これから入ることになる大きな街がある。

「綺麗な街……」

ここからは、下に広がる街の全景が見渡せた。

レンガ造りの建物が立ち並び、所々でしようろ鐘楼が天を支えるように伸びていた。それらの白い壁が西から差し込む夕焼けに照らされて、町全体が燃えるような朱色に染まっている。私達は、しばらくの間言葉少なにただその光景を眺めていた。

街に入ると、夕方という時間帯もあってか、大通りは人に溢れ、活気に満ちている様子が肌で感じられた。

商店の呼び込みが飛び交い、どこかに屋台でもあるのか肉を焼くような匂いが漂ってくる。少し開けた場所に出てみれば、行商が簡素な机に品物を並べ、中心では公示人が集まった人々に朗々と語る声が響いている。

「私こんな賑やかな街に初めて来ました！」

「私も初めてだ！ とりあえず泊まれるところを探すから、はぐれるなよ！」

周囲の雑踏に負けないように大声で会話しながら、私は宿を探して歩き回った。

訪ねた宿はどこも部屋が埋まっており、なんとか二人部屋を取れたのは三軒目でのことだった。

「すごい人混みでしたね……。このくらいの街になると、あんなに人が集まるんですね……」

ベッドに身を投げ出して、疲れた様子でクロエが呟く。

実際のところ、元から賑やかな街ではあるものの、普段はこんなに人はいないらしい。先ほど宿の主人に何気なく聞いてみたところ、明日の夜この街では祭りがあるようだ。規模の大きなものらしく、今街にいるのは外から来た観光客も多いらしい。

そのことを話すと、人混みを歩いた疲れは吹き飛んだらしく、彼女は目を輝かせて食いついてきた。

「お祭りやるんですか！？ いいなーお祭りー」

「じゃあ行くか？」

彼女は目を丸くして私を見つめた。まさか行けるとは思っていなかったのだろう。

祭りなど私もクロエも行ったことが無く、ここに来るまでの会話の中でいつかやってみたいこととして挙げられていたので、せっかくだから参加してみようと考えたのだ。

「いいんですか？ でも明日には馬車で王都に行かなきゃいけないんじゃないか……」

「元々馬車の事故で思いっきり遅れてるんだ。別に一日くらいいいさ」

この街の衛兵の詰め所に行けば、王都に手紙くらい届けてくれるだろう。そしたら馬車の事故にあってやむなく徒歩で来た旨を、明後日に変更した到着日と共に手紙に書いてしまえばいい。届けて今更どうにかなる訳でもないが、国が安心して処刑の準備を始めれば、これ以上の捜索が打ち切りになることくらいは期待できよう。

これには、彼女に執行される死刑に対する、私のわずかな抵抗も含まれていた。

だが一方で、こんなことはただの逃げにしかならないことは十分にわかっている。一日延ばしたところで、結局一日遅れで処刑が行われるに過ぎないのだ。

終わりの見えない思索に囚われている内に、隣のベッドから寝息が聞こえてきた。やはり人混みを歩いて疲れていたのだろうか、それとも、自分が死ぬ日が一日延びたことで安心したのだろうか。

私は彼女のベッドの横に立ち、月に照らされて私と同じ金色に輝くその髪を、そっと撫でた。それから小さな机に向かい、王都に送る手紙を書くために筆を執った。

今日が、クロエと過ごせる最後の一日。

寝ぼけ眼を擦って窓の外を見ると、太陽が思っていたより高い位置にあるのがわかる。もう旅をする必要が無いとは言え、少し寝すぎてしまったか。

隣のベッドはもぬけの殻で、部屋には私一人だった。彼女は先に起きて用を足しにでも行ったのだろう。そこまで考えて、もはや逃げたなどと疑いもしない自分に気付いて苦笑した。

自分の仕事を考えればあってはならないことだが、そんな自分自身にそこまで悪い気はしなかった。

少して、クロエが部屋に帰ってきた。どうやら私の予想は外れていなかったようだ。

そして軽い朝食を済ませた後、私は彼女に封筒と二枚の紙を渡した。



「これ何ですか？」

怪訝な顔で彼女が尋ねる。

「その封筒には到着が遅れた理由と到着日を書いた手紙が入ってる。これをこの街の兵舎に届けてくれ。場所は昨日少し確認しておいて、そっちの紙に書いてあるから」

「えっ？ でも私がそんなこと……」

彼女は困惑してかぶりを振っているが、私は気にせず話を続けた。

「お前の顔をちゃんと知ってる奴なんて、お前を捕まえて裁判にかけた奴らくらいだ。そんな奴らが、裁判したところから離れたこの街にいるわけない。バレやしないだろ」

「でっ、でも……」

「頼むよ。私はちょっと無くなる前に買って来たいものがあるんだ。客に面倒なことを頼まれた宿屋の娘みたいな感じで、『これを王都に届けてください』って言うだけでいいから」

「わかりました、やってみます」

そう言って出発しようとするクロエを呼び止める。

「あ、あとそれから」

「まだ何か？」

彼女が本当に面倒臭そうな表情で振り向く。申し訳なく思うが、これは必要なことだ。

「簡単なものでいいから、兵士の兜と装備一式を借りてきてほしい。持てなくても、後でここの従業員にでも金を握らせて取りに行かせるから」

彼女が馬車の跡から回収してきた四人分の路銀。当時はその行為はどうかと思ったが、それがこういう形で役に立つとは。

「そんなの借りられるんですか？」

「出来るだけでいい。もう片方の紙に一筆書いたから、それを見せれば少しは融通が利くはずだ。頼むよ、普通の服装で王都からの迎えに会う訳にはいかない」

「……わかりました」

渋々といった感じで了承した彼女は、封筒と紙片を手を持って部屋を出て行った。

封筒には騎士しか使うことを許されない騎士団のエンブレムを刻んだろう蠟と、至急届けるべき文書であることを記した一文がある。大した説明をしなくても、すぐに王都へ届けてくれるだろう。

装備についても、先ほどのふうろう封蠟と、政府の命令で動いており装備がきゆうきよ急遽必要になったことを、サイン付きで書いておいた簡易な申請書があれば問題無いはずだ。剣や本格的な鎧は無理でも、兜と革鎧が手に入れば十分だ。

兵舎に向かった彼女の背中を見送り、私は着替えるために荷物を開いた。

しばらくしてクロエが部屋に帰ってくると、彼女は私が持っていた紙袋に気付いた。

「あれ、何か買って来たんですか？」

「ああ、これか」

そう言って私は袋からそれを出して机の上に置いた。

「お酒……ですか？」

怪訝な表情で酒瓶を手を持つ彼女に、私は話を続けた。

「前言ったと思うけど、私の祖父母は葡萄酒を作ってたさ、これがその葡萄酒なんだ。この街に来た時に偶然一本だけ見かけて、さっき買ってきた」

彼女は得心したように頷いて酒瓶を見ていた。

「思い出の品ですね」

「まあな。でさ、祭りが終わったら部屋で飲んでみないか？ あまり街でこれを見かけないから私も久しぶりに飲みたいし、お前にも、その思い出の品って奴の味を知ってほしいんだ」

「いいですね！」

そんな約束をして、葡萄酒を荷物に詰め込んだ私達は宿を出た。太陽は真上、もう

正午ごろのようだ。

祭りが始まるまでまだ時間がある。何をすると無く街を歩いていると、仮面を並べた露天が目止まった。

すると、私達が仮面に興味を持ったことに目ざとく気付いた主人が突然話しかけてきた。

「お嬢さん達、今夜の祭りには参加するのかい？」

「はい、参加するつもりです！」

クロエが、元気良く答える。

「だったら仮面を買っていくといい。うちの祭りでは、仮面を着けるのが慣わしのなさ」

大柄な主人が、野太い声で言った。

確かに、仮面を着ける祭りの話は聞いたことがある。それに、これでも彼女は死刑囚の身。顔を隠せた方が気を張らずに祭りを楽しめるかもしれない。

結局私達は二人分の仮面を買った。鼻から上がすっぽり隠れるタイプの、宝石のような小石が散りばめられた綺麗な色合いの仮面だ。

仮面どころか友人とこうして買い物をしたことすら無かったであろうクロエは、初めての経験をしてとても嬉しそうに歩いていた。

まだ暗くなっているはいないが、少しだけ日が傾いてきた。

周りを見ると、角材や木の板などを抱えた男達が走り回っている。祭りのための設営が行われているのだろう。

「なんだか、祭りの前って感じでドキドキしますね！」

「そうだな。何でか私まで緊張してきた……」

薄暗くなってくると、男達は辺りにたくさん設置された蝋燭や松明などに火をつけて回っていた。仄暗い街に、一つずつ光が灯り始める。

日が完全に落ちると、祭りの始まりだ。

暗い大通りを照らすたくさんの灯りが、ぼんやりと人混みを浮かび上がらせている。

道の所々で楽器を弾く小さな楽団の奏でる陽気な音楽が非日常的な空間を明るく演出し、鮮やかに着飾った人々の装いと、彼らの着ける仮面がその感覚を加速させる。

昼には壁の白や黄色と石畳の青みがかかった灰色で支配されていた空間が、夜の黒を背景にたくさんの色彩で埋め尽くされているようだった。

周囲には昨日よりたくさんの屋台が軒を連ねており、大道芸人達があちらこちらで芸を披露しているのが見える。彼らが何かをする度、観客達が手を叩いて喜んでいった。

そんな中で彼女は祭りの熱気に当てられたのか頬を紅潮させて、輝く青い目を仮面から覗かせながら辺りを見回している。きっと私も今、同じような顔をしているのだろう。はぐれないように繋いだ手がこんなにも熱いから。

「どいたどいた！」

「きゃっ！」

人混みの間を縫って走ってきた子供達が、私達の間を強引に駆け抜けていった。

突然手を離された私達は彼らの去った方を見て少し呆然とした後、顔を見合わせてどちらともなく笑い出した。

「ふふっ……、あはっあははは！」

祭りの夜、どこにでもいるような仮面の娘達が腹を押さえて笑い続ける。

何故かはわからない。わからないが、とにかくおかしくて堪らなかったのだ。

ようやく落ち着いて、仮面を少し浮かせて目の端に浮かんだ涙を拭う。

「……行こうか」

「はい！」

私達は改めて手を握って、臆することなく群衆の中に飛び込んでいった。

煌びやかな露天や屋台が並ぶ祭りの中、木の実の入った焼き菓子を食べながら歩く。

美人姉妹に一つおまけするからと屋台の主人に言われて、二人して照れながらつい買ってしまったのだ。要するに、体の良いお世辞にまんまと乗せられた形だ。

「姉妹って……言っていましたね」

「まあ、背格好は大体同じくらいだな」

彼女の言葉に、私は言い訳するようにぼそぼそと呟いた。

「髪や目の色も同じですし、案外似てるんですね、私達」

「うーん、やっぱりそうなのかな……」

店からしたら良いカモなのだろうが、私達もそのことがわからないほど愚かでは無い。ただ、純粹に嬉しかったのだ。この前まで死刑囚と護送役という間柄でしか無かった私達が、こうして姉妹のような共通点を見つけられたことが、楽しかったのだ。

「……甘い」

砂糖で漬け込んだ木の実の甘さが、口の中に広がった。

通りに展開した店や大道芸人などの間でてんでばらばらに動いていた群集が、ざわつきながら同じ方向に顔を向けだした。

「何かあるんですかね」

彼らに従ってそちらに目を向けて少しすると、答えが自ら現れた。

「うわあ…」

夜空に開く、大輪の花。

それを見て、隣で彼女が胸を打たれたようにため息をついた。

確か、花火と言うのだったか。大きい街では祭りでこういうことをするのだと聞いたことはあったが、私も見るのは初めてだ。

競うように次々と咲き誇る光の渦が、惚けたように空を見上げる彼女の顔を鮮やかに染める。花火が上がるくぐもった音が身体の芯を揺らし、咲き終えた花火から花びらのように落ちる火の粉は儚く闇に消えていく。

頭上で光の粒が音と共に広がる度に、今まで関わってきた人々の姿が脳裏を過ぎる。幼い頃に死に別れた両親、代わりに育ててくれた醸造家の祖父母、数奇な成り行きで旅した死刑囚……。

村が炎に包まれたあの日、私だけが生き残った意味とは何なのだろうか。

幻想のような光景を眺めながら、私はふとそんなことを考えた。

さすがに疲れて宿に戻った私達は一つのベッドの上、灯りも灯さずに背中合わせに座り込んでいた。私も、表情は見えないが恐らく彼女も、どこか満たされた気分だった。

花火はもう終わったが、窓の外からは未だに人々の歓声が聞こえる。祭りの日だけは夜更かしを許されるのか、子供の声も混じっているようだ。

「お祭り、楽しかったですね」

「ああ……。こんなに楽しかったのは、本当に久しぶりだ」

両親を亡くして以来私の心は何かの欠片が抜け落ちたようで、どうにも生きる実感というものが無かった。そんな中、旅を通してクロエと言う存在が私の胸の穴を埋めてくれたような気がして、私は天涯孤独になったあの日以来の充実感に包まれていたのだ。

だからこそ、これから死に行く彼女のために私に何が出来るだろうかという疑問が、心の片隅にずっとくすぶっていた。

「私達、もし生まれが違ったら良い友達になれたのかな……」

彼女が、私に背中を預けたままぼつりと零した。

「なれるさ。屋台の主人も言っていただろ？ まるで姉妹みたいに似てるって」

『もし』の問いと、それに対する答え。時計は決して巻き戻せないこの世界で、こんな問答に意味は無い。そんなことは二人とも十分に理解していたが、今の私達にそれ以上に出来ることなどありはしないのだ。

「……じゃあ私、死んだらあの世であなたを待ってますね。あなたはゆっくりこっち

に来て、そしたら今度は本当の姉妹に生まれましょう？」

彼女が私の前に回ってきて微笑んでみせた。もう吹っ切れたようにつくろ繕ってはいるものの、やはり沈んだ様子は声色から隠し切れない。

「何言ってるんだよ……。この、馬鹿……」

私は、そんなありきたりな否定しか言えなかった。

彼女の、生きることを諦めたような様子がたま堪らなく嫌だった。本当なら、来年もまた祭りに参加できて、友達だっていくらでも作れたはずの彼女が、贖罪の名の下に自ら殺されることを選んだという事実に、やり場の無い怒りがこみ上げていた。

「天国には行けないかもしれないけど、私、ずっと、待って」

その時、無理やり笑顔を作るその横顔に、一筋の涙が光った。

「お前……！」

「あ、あれ？ 何でだろうな。ちょっと、ごめんなさい、少し待つ……きゃっ！」

次から次へとこぼれ出す涙を慌てて隠そうとする彼女を、私は思いっきり抱き締めた。

「なあ……。お前は、どうしたいんだ？」

細い肩を折れそうなほど一杯抱き締めて、私は耳元で彼女に問うた。

「えっ？ だから、私のせいで死んだ人達のためにっ」

「殺した人達じゃない！ お前自身はどうしたいんだ！？」

優しい彼女が、赤月党と国の闘争の中で死者が出たことに責任を感じているのは事実だろう。ただ、それによって公衆の面前で首を落とされることを本当に望んでいるかと言う問いに対しては、その頬を流れる涙が何より雄弁に答えている。

「死ぬの覚悟した奴が、そんな顔する訳無いだろ……！」

彼女は答えない。

無限にも思える沈黙が流れ、外の騒ぎ声がやけにはっきりと聞こえる。

彼女は涙を拭くのをやめたのか、両腕をだらりと下げた。そして、おえつ嗚咽を漏らし始めた。

「そりゃ、嫌だよ……。怖いよ……。こんな皆に嫌われたまま、死にたく、ないよ……」

つかえながら吐き出したその気持ちを聞いて、私はより一層彼女を強く抱き締めた。切実な言葉にその震える背中がより一層愛しく感じられた。

いや、自分の背負った罪のために死ぬことを受け入れる。彼女は以前そう言っていた。その時は私も、彼女はそういう覚悟を決めたのだと考えていた。

だが、それが間違いであることは彼女の涙を見て改めてわかった。

赤月党という集団に向けられる憎悪を一身に集めて、根は普通的女である彼女が何も感じない訳が無い。

自己犠牲と言えれば聞こえは良いが、死ぬ覚悟などというものは彼女一人が支えるにはあまりに重過ぎる荷物なのだ。

当たり前のことだ。誰だって死ぬのは怖いし、そもそも死にたくななんて無い。いくら犠牲者の責任を取る覚悟を決めたつもりであろうと、彼女もそれは同じはず。

そんな当たり前のことに、私はようやく気付けた。

指導者としてあが崇められるか利用されるかしかしてこなかった彼女にとっても、自分の本心を初めて言葉に出来たのはこれが初めてなのかもしれない。

「嫌だよ……。こんなの……」

「ああ……。ごめんな……。ごめん……」

夜が更ける中、私はえずく彼女の背中をひたすらさすりながら考え事をしていた。

恐らく、これがクロエ・メリクルの等身大の姿。こんな弱い彼女が断頭台に向かうのに、私が彼女にしてやれることは何も無いのだろうか――。

空を塞ぐように広がる曇り空と、石で舗装された街道の間を、一輛の馬車が駆ける。陰気な目をした御者が鞭を振るう度、馬車を引く二頭の馬は鼻息を荒げて速度を上げた。

馬車の中には三人。死刑囚と、それを届けた兵士と、王都から迎えに来た兵士だ。

最初に馬車に乗った時と同じように、彼女は私の対面に黙って座っている。だが位置関係はあの時の逆で、兜の奥から覗く表情は暗く沈んでいる。

私は冷たい風に髪を後ろに靡かせて、馬車の外を眺めた。そこには灰色に染まった世界が漠然と広がり、青空が覗くことは無い。その場にいる誰も口を開くことは無く、湿った沈黙が空気に満ちていた。

馬車に乗ってから半日と経たずに、王都を囲む城壁が近付いてきた。

御者が門番と何か言葉を交わすと、王都の中と外を完全に隔絶するように固く閉ざされていた巨大な城門が、きし軋みながらゆっくりと開いた。

外を見ると、どこから聞きつけたか大勢の市民達が既に街路の周りに集まっていた。

彼らが多く集まっているところに差し掛かると、クロエを憎む市民達の罵倒がまるで矢のように馬車に降り注いできた。私自身に向けられたものではないにも拘らず、彼らの言葉は次々と私の胸に深く突き刺さる。

世界中から存在を否定されたかのように際限なく降り注ぐ圧倒的な憎しみ。以前は私も向こう側に居たためわからなかったが、こうして改めて受けしてみるとその恐ろしさが身に染みて感じられた。

全ての人々に死を願われている。そんな感覚が絶えず神経をさいな苛み、向けられる憎悪の一つ一つが魂を少しずつ削っていく。

私は実質当事者ではないからまだ良いが、彼女は今まで、一体どんな気持ちでこの苦痛をたった一人で受け止め続けてきたのだろうか。

私達は馬車の中で、どんな豪雨よりも激しく冷たい憎悪の嵐に晒されながら、城壁沿いに建てられた監獄の中に入った。着替えなど死刑執行されるまでの準備はこうした監獄で行われるのが一般的であり、それは史上最悪の犯罪者もまた同じだ。

迎え、私、クロエの順で馬車を降りて、今にも消えそうな蠟燭で照らされた石造りの暗い通路を進む。死刑囚は、公開処刑が行われるまでこの先にある独房に入れられることになっている。

「なあ、私をここまで送ってきた騎士さんと、二人きりで話をさせてくれないか？」

「……はあ？ 死刑囚のお願いなんぞ通るわけねえだろ」

突然の提案を、もう一人の兵士はにべも無くは撥ね付ける。しかしそこで、彼女がおずおずと彼の肩に手を置いた。

「私からも、お願いできますか。多分すぐに終わりますので」

「うーん。まあ、あんたが言うなら別に構わんが、早めに済ませてくれよ」

彼は眉をひそめて少し考えたが、提案に彼女が乗ってきたことで渋々了承し、その場を一旦立ち去った。

誰も居ない薄暗い通路で、二人の女が対峙する。一人は手枷をは嵌められ、一人は腰に剣を下げている。

「本当に、いいんですか？ その、あなたがこんな目に遭う必要なんて……」

「いいんだ。両親が死んで以来、私は何をしてても生きてるって感じがしなかった。でも、お前が私を蘇らせてくれた。だから、私は私の命をお前のために使える」

「でも、そんなこと……」

兜を外して脇に抱えた彼女が、泣きそうな顔でこちらを見る。

「もう散々話し合った後だろ？ お前が犯した罪は確かだけど、お前は世間が言うほど邪悪な存在じゃない。お前はこんな冷たいところで死なせたくないんだよ」

「……ありがとう……ございます。……ごめんなさい」

「ああ、こちらこそ、ありがとう」

その後も二言三言言葉を交わし、私は彼女を送り出した。

彼女は何度もこちらを振り向きながら、俯いて通路を遠ざかっていった。

「ありがとう、ごめんなさい……か」

どちらも、私には過ぎる言葉だ。

私は決して、彼女の罪を肩代わりすることなど出来はしないのだから。

わら藁と桶しか無い狭い牢の中、私は枷の触れる足首をさすりながら思考を巡らせていた。

五分も無かったが、最後に話をして伝えるべきことは伝えられた。後はもう、ただその時を待つだけだ。

王都に入った時と比べ、不思議と気分は落ち着いていた。

両親の死と、彼女への想い。その二つが作る葛藤は、もはや私を苛むことは無い。

私の選択が世間的に正しいことかどうかはわからない。きっと、どこまでも身勝手な私の独断に過ぎないのだろう。

ただ、これを思いついた時から私の心は一度だってぶれることは無かった。並べる理屈は色々あるが、結局のところは簡単な動機だ。民衆によるあまりに酷い仕打ちに我慢ならず、彼女をこんな憎しみの中で死なせないために命を投げ出してしまえるほど、彼女は私にとって大きな存在になってしまった。ただそれだけのことだ。

後悔は無い。恐れも無い。私の胸にあるのは、安堵と喜び。これでこんな憎しみの中で彼女を死なせずに済むと言う安堵と、彼女によって救われた私の魂を、彼女のために使える喜び。

ただ、どうかこの選択が、少しでもクロエと被害者達の救いとならんことを。

私は牢の中で、ただ心静かに祈っていた。

\*\*\*

外は既に霧のような雨が降り出し、王都を包み込んでいた。

護送役の任を解かれて監獄から出た私は、激しい罪の意識と自己嫌悪を感じてうつむ俯きながら街を歩いていた。

私は最低だ。

覚悟だ何だと言っておきながら、土壇場で怖くなって泣き出し、代わってもらうなんて。

彼女は私にとって特別な存在だった。最初は敵視されていたものの、次第に打ち解けて、まるで姉妹のように仲良くなれた。私は彼女の、ぶっきらぼうな男言葉の中に思いやりや優しさを覗かせるところが好きだった。崖から転がり落ちる馬車の中で手に触れた温かさは、私にとって救いだった。今まで革命軍の中で生きてきた私にとって、彼女は初めて出来た親友だった。

なのに私はあろう事か、私の背負うべき罰の全てを彼女に肩代わりしてもらった。いや、正確に言えば肩代わりさせた、が正しいだろう。私は初めから、そうなるように仕向けてきたのだ。

昔からそうだった。私が心で何を思っていたように、何を考えていようと、私の頭は常に冷たく計算し、自分が生き残るための答えを導き出し続けてきた。

それだけではなく、私の身体も、その答えを実行できてしまうのだ。頭で割り出した答えを何の感傷も無く忠実に行って自分の生存を確保する。心がどうであろうと、それが出来てしまう。私が大嫌いで、赤月党が目をつけた、私の才能。

王都を追われて赤月党に入った時も、心は母や生きる家を失った悲しみに張り裂けそうだったのに、私は組織に生かしてもらうために働き続けた。

本当は争いごと、人殺しも大嫌いだったのに、私は人殺しの助言をし続けた。

国に属する軍と違って組織として不安定な反乱軍においては、大勢いる後方支援の一人のままでは優先順位がとても低く、物資も行き渡らずいつ切り捨てられてもおかしくない。だから確実な生存を保障するためには、自分の有用性を証明して組織に重用される必要がある。『みんなに求められたから』なんて理由も、そんな理性的な判断に感情を従わせるために思い込んだ方便だったのかもしれない。

そしてまた今回もやってしまった。

一緒に旅をして、彼女を姉妹のように思っていたのは事実だし、償いのためにこの命を捧げる決意をしたのも本当だ。

それでも私の脳は、彼女をそそのかし、代役に仕立て上げる命令を出し続けた。そ

もそも、私に似た容姿の兵士が護送役に就いたと知った時から、頭の中でこの計画を練ってきたのだ。そして袋ごと飲み込んで隠してきた毒薬を使って、息のあった他の護送役を殺害。対一の状態を作り、ここまで来てしまった。

冷たい霧のような雨に体を濡らしながら、私は当ても無くさ迷う。

道を行く人達は皆、浮足立った様子で私が来た方向に駆けていく。もうすぐ、処刑が始まるのだろう。公開処刑は、王都の人間達にとって数少ない娯楽の一つなのだ。

本来なら、私が死ぬはずだった場所。それは、元々私の住んでいた区画を取り潰して出来た広場だ。役人達が私の過去を知っていたとは思えないが、まさに私を殺す場所としてこれ以上無い舞台だったはず。

それなのに、私は生きて、彼女を置いてきた。その事実が、鉛のように私の体へのしかかる。

せめて見届けに行くのが筋なのかもしれないが、私の脳が、理性がそれを許さない。あの場所に行って彼女の死を見てしまったら、私はきっと壊れてしまうだろうから。これから生きていくためには、それは不都合なことなのだ。

私の心はもはや生きる気力を失っていて、出来ることならこのまま倒れこんで風雨に晒されて朽ちてしまいたかった。

でも、私の脳は足を動かし続ける。この後は死んだクロエの名を捨てて、別の人間として生きようとするだろう。それから、もしかしたらまた誰かのところに身を寄せて、必要なら切り捨ててしまうのかもしれない。

ここまで考えた辺りで、私の足は止まった。

ふと顔を上げると、少し大きな宿屋が立っているのが見えた。

このままでは風邪を引いてしまうから、まず暖かい宿に一泊して英気を養おう。理性が下すその判断に、私は逆らうことが出来なかった。

一階の酒場で手続きを済ませて、私は部屋に入った。高級そうな調度品が並び、柔らかいベッドに、壁には暖炉までしつら設えてある。客がたまたま少なかったからかもしれないが、払った値段の割に随分と豪華な部屋に通されたようだ。

心身ともに疲れ切った私は、荷物を床に投げ出してベッドに座り込んだ。

その時、床に落ちた衝撃で荷物から酒瓶の口が飛び出しているのが目に入った。

「そういえば、結局飲めてなかったね……」

呟きながらベッドから降り、酒瓶を手にとった。

暖炉に火を入れてから酒瓶を机に置き、栓を抜く。すると、思ったよりあっさり抜けてしまった。もしかしたら、知らない内に彼女が少し飲んだのかもしれない。

ベッドを抜け出してこっそり酒を飲む彼女の姿を想像して、思わず頬が緩む。

栓を抜いたことで、葡萄のほうじゅん芳醇な香りが部屋に広がった。

酒瓶を持ち上げて目の前にかざすと、深い赤紫の向こうで、暖炉の火がちらちらと踊るように舌を揺らしていた。

\*\*\*

「死刑囚クロエ・メリクール、入場せよ！」

役人のよく通る声が響き、私は手枷の鎖を引かれて断頭台の前に連れられた。

雨天にも拘らず広場には大勢の観客が集まり、唾を飛ばして歓声を上げている。皆一様に興奮で顔を赤くし、辺りは異様な熱気に包まれていた。

最悪の犯罪者の処刑を前にしてたかぶ昂る彼らに対して、私の意識は波一つ立たない湖のようにせいひつ静謐であった。

彼女はどうしているだろうか。雨に打たれて寒い思いをしているのではないのだろうか。この状況にあっても、私の心に浮かぶのはそれだけだった。

観客の罵声が飛び交い、国中の憎しみで織られた刃が向けられるのを感じる。

だが私が動じることは無い。これは私に向けられたものでないことはわかっているし、彼女をこんな矢面に立たせずに済んでよかったという気持ちだが、私の心の芯になっていた。彼女の罪は、こんなところであがな贖われるべきじゃ無い。

もし当事者である彼女が予定通りここにいたら、彼女はどんな気持ちでこの責め苦を受けたらどうか。その心情を考えれば、今の私が置かれた状況など些細なものだろう。私が代わってやれるのは、この責め苦だけなのだ。

実際、私が身代わりになることは彼女の計画の内なのかもしれないと、気付いていない訳ではなかった。今思い返せば、一緒に事故に遭った私達が大した怪我を負わなかったのに、御者や兵士達は全員死んでいたと言うのはおかしい話だ。あの時私だけを殺さなかったのも、迎えに来た残党を拒んだのも、ただ逃げるより替え玉のクロ工・メリクールを殺させた方が得策だと考えたからだろう。冷静に考えれば、こうした点はいくらでも思い当たる。

でも、そんなことはもはやどうでも良かった。共に旅をする中で、生きるための策を弄する頭脳とは別に、一人の女としてのクロ工が存在することはしかと伝わってきたのだ。

自分の感情を切り離して思考する冷徹な頭脳。『人を信じる』と言う母の教えを心で守りつつ、生き馬の目を抜くスラム街で暮らすために手に入れた、呪いじみた処世術なのだろう。

何より、罪を償いたいと言ったあの顔、何の変哲も無い森を存分に楽しんでいたあの姿、心奪われたように花火を見つめたあの目、死ぬのは怖いと零したあの言葉……。私の見てきた彼女は紛れも無く本物で、私にとってかけがえの無い思い出になっていた。

だから私は、彼女のためにこの命を捧げられる。

「その悪魔を殺せ！」

「罪を償わせろ！」

役人は観衆の盛り上がり満足したように頷くと、仰々しく両手を広げて宣言した。

「それではこれより、正義と神の名において、この女に死刑を執行する！」

一気に沸き立った観衆の声が広場を満たす。その光景を、私はどこか他人事のように眺めていた。

誰も私を疑わない。確かに私の容姿は、特徴を大雑把に記した手配書と合致する程度には彼女と似ている。だが何より、政府の命令書を持った護送役が、犯罪者と入れ替わっているなど考えもしないのだろう。

顔を隠す頭巾を被った大柄な執行人が私の肩を掴み、断頭台の前にひざまづかせる。

冷たく濡れた断頭台に首を置くと、執行人は後ろ髪を片手で引っ掴んでうなじを露出させた。空から落ちる雨粒が首に当たり、背中へと滑り落ちていく。

すると、大きな斧を持ったもう一人の執行人が現れ、位置を確認するように、私のうなじにそっと刃を当てた。

彼女は、荷物に入っていた葡萄酒に気付いただろうか。結局二人で飲むことの無かった、私の思い出の葡萄酒。もし見つけたら、彼女はきっと飲むだろう。あの子は優しい心を持っているから。その優しさが、彼女を縛る理性の隙間だ。

昨夜の約束はほご反故になってしまうだろうけど、きっと近い内にもう一度会えるだろう。私の方が、少し先にあの世に着くだけだから。

そしたら約束通り、本物の姉妹になろう。

私の首筋から金属の感覚が離れ、頭上から斧が空気を裂く音が聞こえる。

これで良かったのだ。これがきっと、私の想いと彼女自身の背負う罪に対する、最適解だ。

冷たい金属に、冷たい雨。こんな冷たい場所で、彼女は死ぬべきじゃ無い。彼女が死ぬのは、もっと、そう、暖かいところで――。

\*\*\*

私の口の中に、葡萄の優しい甘みと酸味が広がっていく。これが、彼女の思い出の味。



理性という枷の中、私が彼女のために出来ることは、これだけだった。思い出を共有して、彼女を偲ぶ。結局ただの自己満足でしか無いけれど、せめてもの弔い。

しばらくそうして感傷に浸っていると、酒が回ってきたのか、視界がぼやけて頭もふらついてきた。

「あれ、私こんなにお酒弱かったかな……」

ぼんやりと呟きながら、私はおぼつかない足取りでベッドに歩いた。

「おっとと……」

よほど酒が回ったらしく、床に置いたままの荷物につまづ躓いてしまった。すると、横に倒れる荷物から、空になった小袋がぱさりと落ちた。いざとなったら彼女も殺せるように、ずっと持ち歩いてきたはずの凶器だ。

「確か、結局最初以外使わなかった……。でも何で空に……？」

それ以上、頭が回らなかった。とにかく、眠くて仕方が無いのだ。

考えるのを止めて、私は柔らかいベッドに倒れこんだ。

とりあえず、一眠りしてから考えよう。

暖炉の火で暖められた部屋の中、暖かいベッドに包まれて、私はどんどん思考が回らなくなるのを感じていた。

枷のように私を縛ってきた理性が、その動きを止めていく。身体感覚はもはや消え失せ、ぼんやりと薄らいでいく意識だけが残る。

視界が完全な闇に閉ざされるその瞬間、私と同じ金髪をなび靡かせた女の後姿が、見えた気がした。

ああ、あたたかい。

\*\*\*

背後から、冷たい死が迫るのを感じて、私は両親とクロエに思いを馳せた。両親の弔いも、彼女の罪も、私の想いも、きっとこれで全部清算される。すると、金属がぶつかる大きな音と一緒に、首の辺りがカッと熱くなって、

次の瞬間に私は空を見ていた。

厚い雲の谷間から、あの子の目のような青色が、

光が消えた、女の目を見つめていた。

[戻る](#)